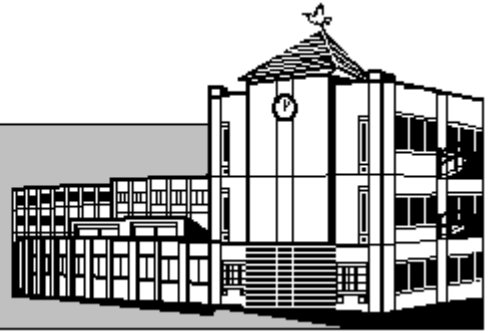


図書館だより



第6号(1998年11月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

学外から

シルクロードへの想いと夢

川崎和雄

昭和十年から二十年までの十年間は、魔法の森のような時代と考えられると、某作家が言いましたが、まさにその時代を少年期で過ごした私は、人並に軍国少年であったと思います。

田舎の農家で育ち、読書環境というよりは文化的にも恵まれない時代と共存した私ですが、子供の頃より本好きだったようです。「少年倶楽部」の他古い雑誌中心で、講談本なども好んで読みました。中学に入り文学というものを知りましたが、文学少年にはなれず、また勉強にも余り熱を入れず、やがて勤労動員で三菱重工へ、そして海軍特幹で終戦と少年時代が終わり、いわゆる魔法の時代から解放されます。

戦後の乱読雑読も、やがて紀行文などに興味が向きます。井上靖氏等の小説で西域・シルクロードに惹かれていきますが、少年期の大陸や秘境への憧れや夢が深層にあり、「少年倶楽部」連載の山中峯太郎氏等の小説が、その後西域病患者になる程の影響があったのかと思っています。昭和三十年代後半頃より、シルクロード関係の著作物が多く出版されるようになり、殆どが知り合いの書店への注文ですが、期待に胸をはずませ届くのを待っていたものです。

十年前、シルクロード終着駅の奈良にて、「なら・シルクロード博」が開催され、シルクロードのロマンの一端に触れ、さらに斑鳩・飛鳥にも足をのばして日本の心のふるさとを訪ね、はるかな時代を偲ぶことができました。実は二十年程前、旅行寸前やむを得ぬ事情で中止してからは機会なく、現在体調の関係で西域旅行は断念しております。しかし、森豊氏をはじめ多くの著者(書)を知り、また夢をふくらます事ができましたし、「夢を掘りあてた人」にはなれませんでした。何時の間にか夢が書棚を埋めるまでになってしまいました。

歴史上の人物に惹かれる、ある著者の作品に集中するなどの読書で、若い時から無趣味な人間であったため、読書に偏りがちな生活を反省しております。昨年は「鬼平」を十分に楽しませてもらい、現在「街道をゆく」を読み始めており、他に生老病死に関する著書に目がゆきます。本が好きというよりも、老いてからも楽しめるということが有り難いことですし、相変わらずの雑読の傾向です。

(新発田市在住)

読書随想

塩野七生著『ローマ人の物語』について

伊藤豊治

最近読んだ本で、抜群に面白かったのが標題の歴史物語である。ローマの建国にはじまり、アウグストゥス帝にいたるまでのこの著作は、1992年に新潮社から刊行が始まり97年までに6巻が出た。日本人がイタリアの古代史について、これほど詳細に、深い洞察力をもって、興味深く物語ることが出来ることに驚く。もっとも、塩野女史はイタリアを舞台に数々の著作があり、多くの賞に輝く才媛ではある。その素晴らしさの1例として、『ユリウス・カエサル』について述べてみる。

ユリウス・カエサルと言えば、イギリス文学に興味ある者は、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』、殊にシーザー暗殺にいたる前後の場面を思い出す。塩野氏もこれに言及しているが、彼女の記述はシェイクスピアのそれと些か異なる。シェイクスピア劇では、元老院体制の共和国を軽んじ国王への野心を示すシーザー、それに対し共和国とローマ市民の自由を護りシーザー打倒のため結集するブルータス、カシウス一味の対立という図式で描かれる。そしてシーザー暗殺直後の、ブルータスによる市民の自由を強調した理路整然たる演説、市民の歓呼で迎えられたこの演説は、その後に登壇したアントニウスの巧妙な扇情的弁舌により覆され、ブルータスの演説に熱狂した群衆は逆に暗殺団一味の殺戮に

走りだす。如何にも劇的な場面だが、この辺は劇作者の創作である。そしてシーザー自身は、主に暗殺者達の観点から描かれているため、いかにも傲慢不遜、大言壮語を弄し、甘言に弱い野心家として登場する。

シェイクスピアはプルタークの『英雄伝』をもとに劇作したと言われるが、その伝記でも、またスエトニウスの『ローマ皇帝伝』でも、シーザー暗殺にいたる記述は、策士達に暗殺計画を抱かせたシーザーの欠点に焦点が絞られている。それに反し、塩野氏の描くこの場面、そしてシーザーの全体像はそれとは全く異なる。それは、『ガリア戦記』等にも見られる軍事的天才、イタリア半島に^{きよくせき}躊躇したローマにこそ相応しい元老院主導の共和国を、ほとんど全ヨーロッパに亘る版図にふさわしいローマ帝国に改造しようとし偉業半ばで凶刃に倒れた政治的天才、冷厳ではあるが冷酷ではなく全ての敵を許す寛大さ、そしてその寛容により許され重用されたブルータス、カシウスの裏切りゆえに挫折した、英雄色を好む所はあるが、スケールの大きないかにも魅力的な人間像を感動的に物語っている。

(本学教員)

塩野七生『ローマ人の物語』：第1巻ローマは一日にして成らず、第2巻ハンニバル戦記、第3巻勝者の混迷、第4巻ユリウス・カエサル ルビコン以前、第5巻ユリウス・カエサル ルビコン以後、第6巻パクス・ロマーナ、第7巻、悪名高き皇帝たち。『プルターク(表記はプルタルコス)英雄伝：上中下』ちくま学芸文庫。スエトニウス『ローマ皇帝伝：上下』岩波文庫。カエサル『ガリア戦記』岩波文庫。

読書のたのしみ 2篇

『ウェルテル』を再読して

桑原ヒサ子

今年5月に新潟市関屋地区公民館でヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ作『若きウェルテルの悩み』について解説する機会がありました。以前この作品を読んだのは、ドイツ文学史のレポートを書いた大学2年の時でした。人妻ロッセに恋したウェルテルが、その想いかなわず自殺するという筋は、この本を読んだことのない人でも知っているほど有名な作品です。レポートの中で何を書いたのか、詳しいことは忘れてしまいましたが、この小説が単なる恋愛小説ではなく、社会批判的立場から書かれたものであることを熱く述べて、[A]の成績をもらったことを覚えています。それ以後、この本を開くこともなかったので、私自身が当時の私の母の年齢になって、この青春の書を再びどう読むことができるのか、少しスリリングな気分でもありました。

ページをめくると、自然を賛美し、合理に対する感情を謳歌するウェルテルが現れます。「ああそうだった、確かにこの表現、この単語だった」と、驚くほど鮮やかにこの作品との出会いがよみがえってきました。その一方で、当時とは全く違



った読み方をしている自分に気づきました。もはやウェルテルやロッセに同伴する読者ではなく、学生時代には全く関心をひかれなかった作品構成の緻密さや見事さ、言い換えれば作品が持つ今まで気づかなか

った魅力を発見している点でした。

ゲーテほど自らの体験を作品に反映させる詩人はいないといわれます。この作品も、23才のゲーテが、信頼できる友人の婚約者に恋し、失恋した体験と、別の友人が人妻との恋からピストル自殺するという事件が下敷になっています。晩年のゲーテは青春時代の感情過多な自分の姿に遭遇するのを嫌って、この作品を読み返すことはなかったといわれています。しかし、ウェルテルには一詩人の過去が描かれているのではなく、時代を超えてだれもが通過する一時期の魂の状況が報告されています。私は、学生のみなさんに、こうした自分サイズで読める青春の書をたくさん読んでほしいと思います。それは、年齢を重ねてから再読する楽しみを準備するステップでもあります。年を経てから本を読み直す魅力は、一つの作品の別な味わい方ができるというだけではありません。作品を再読するという行為を通じて、その間に成長した自分自身を見つめることにもなるからです。(本学教員)

ゲーテ作、高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』新潮文庫

自分流の読書

95K069 南雲 龍

季節は秋。夜長に頁をくるのにも何となく心地良さが感じられる季節です。無意味な人付き合いに疲れたら、一人半の孤独を寝ころびながらの読

書で楽しみましょう。何を感じるかは知りませんが、ただ、そこには大学生のあなたの感覚があります。去年よりも一年分違ったあなたがいま。そんなこんなで大人となってゆくのもいいもんです。

芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋、別離の秋。秋は何かしら感覚が飢えを感じる季節です。ワンパターンなTVドラマに飽きたら、なんとなく、いつもの面々に会うのに疲れたら、少年漫画を卒業しようと思ったら、その次に本を手取るのも悪くないです。楽しむための本、苦しむための本、悲しい本、知識のための本、全然おもしろくもなんともない本、みな頁をくることができます。どのような本にも作者、もしくは人間というものが見え隠れます。たまにはいいじゃないですか。意味も理由もないまま本を読むことも。

諸先生方の語る読書以外にどこかにあなたの読書があります。誰かに手渡されたわけではない本が今までにあったでしょう。そんな本を久し振りにひも解いてみませんか？

昔読んだ本だからこそ今もう一度読むべき本は多いものです。想いを馳せたロビンソン・クルーソーに別れを告げるのも、シャーロック・ホームズの新たな一面を発見するのも、頭でっかちの山椒魚と蛙をもう一度のぞき込んでみるのも、全てが昔と違ったあなたがページをくり、昔と変わらぬあなたが次の文章を読んだ証明です。

昔挫折した本だって、あらたに生きた何年分かの人生の積み重ね、知識を肥やしにした経験をもってすれば、挫折という嫌な思い出ほどに素晴らしい感動、もしくは経験を得られるものです。

世の中、読めと言われて読んだところで左から右へと抜けるものです。ですが、読みたい時に読まないのも何ですし、読みたくなかった時に読めないのも何です。

何かしたいという人間の欲求の中に心底読みたいという何かを根付かせるのも悪くないです。本当の欲求によって苦しみも迷いも過去のトラウマもみんな笑えるように。これは読書とは違った次元ですけれども、実は読書にも、この笑えるようになる鍵は隠されています。どうぞ、気が向いた時にでも、お探しになってください。ページをくって。

新着図書

0 総記・全集

ジョアンナ・ヌーマン「情報革命という神話」
「本多勝一集 12」 刈谷剛彦「知的複眼思考法」
「丸山眞男座談 1・2」 「福田歓一著作集 3・9」 「家永三郎集 9・14」 「福田陸太郎著作集 1」 「丸山眞男講義録 4」 高橋三雄「パソコンソフト実践活用術」

1 哲学・宗教

M・メルロ＝ポンティ「弁証法の冒険」 E・フッサール「内的時間意識の現象学」 古東哲明「現代思想としてのギリシア哲学」 朝日新聞社「『旧約聖書』がわかる」 白川静「中国の神話」 金子武蔵「倫理学概論」 加藤尚武「現代を読み解く倫理学 応用倫理学のすすめ 2」 金谷治「中国思想を考える 未来を開く伝統」 加藤尚武「20世紀の思想 マルクスからデリダへ」 「プラトン全集 5・6」 ジュヌヴィエーヴ・ロディス・レ「デカルト伝」 バーバラ・シーリング「黙示録の謎を解く 十字架刑後のイエス正伝」 山田晶「アウグスティヌス講話」 森有正「生きることと考えること」 吉田敦彦「日本神話の源流」 徳善義和他訳「宗教改革著作集 15」 飯沼二郎他編「柏木義円日記」 野家啓一他「岩波新・哲学講義 8」 J・カサノヴァ「近代世界の公共宗教」 ハロラン芙美子「アメリカ精神の源 『神のもとにあるこの国』」 武本喜代蔵他「伝記叢書 210～238」 ジル・ドゥルーズ「ニーチェ」 「ヒルティ著作集 1～11・月報」 アルフレート・シュトゥック「ヒルティ伝 ある偉大なるスイス人の生涯と活動」 上智大学中世思想研究所編訳「中世思想原典集成 18」

2 歴史

伊野憲治「ビルマ農民大反乱 1930 - 1932 年 反乱下の農民像」 松本宣郎他編「地域の世界史 7」 蜷川壽恵「学徒出陣 戦争と青春」 瀧浪貞子「最後の女帝 孝謙天皇」 佐々木克「大久保利通と明治維新」 伊波普猷「沖縄歴史物語 日本の縮図」 藤原彰編「南京事件をどう見るか 日・中・米研究者による検証」 シュミット村木眞寿美編訳「クーデンホーフ光子の手記」 小林信彦「一少年の見た 聖戦」 石井洋二郎「パリ 都市の記憶を探る」 植田樹「最後のロシア皇帝」 A・サマーズ「大統領たちが恐れた男 F B I長官フーヴァーの秘密の生涯 上下」 色川大吉「近代日本の戦争 20世紀の歴史を知るために」 J・ブルクハルト「ギリシア文化史 1～5」 岡本幸治「近代日本のアジア観」 大下尚一他編「西洋の歴史 近現代編 増補版」 今泉鐸次郎「河井継之助傳 復刻版」 東京大学史料編纂所「明治史要 全・附表」 尾形勇他編「新版 世界各国史 3 中国史」 坂本龍彦編「シベリア虜囚半世紀 民間人蜂谷弥三郎の記録」 升味準之輔「昭和天皇とその時代」 姜克實「現代中国を見る眼 民衆からみた社会主義」 加藤陽子「模索する 1930年代 日米関係と陸軍中堅層」 吉村作治編「アーキオ 1～3」 瀬島龍三「大東亜戦争の実相」 ヒュー・ボートン「戦後日本の設計者 ボートン回想録」 東野真「昭和天皇 二つの『独白録』」 イラン・ハレヴィ「ユダヤ人の

歴史 近藤和彦「文明の表象 英国」 佐々木克「大久保利通と明治維新」 升味準之輔「戦後政治 上下」 久保尚之「満州の誕生 日米摩擦のはじまり」 司馬遼太郎「明治という国家 上下」 岸本美緒他「岩波講座世界歴史5・13」 本多勝一「中国の旅」 松本健一「白旗伝説」 エドワード・ウィンパー「アルプス登攀記」 マーク・ゲイン「ニッポン日記」 オギュスタン・ベルク「日本の風景・西欧の景観 そして造形の時代」 杉森久英「人われを漢奸と呼ぶ 汪兆銘伝」

牧原憲夫「客分と国民のあいだ 近代民衆の政治意識」 成田龍一「『故郷』という物語 都市空間の歴史学」 小林英夫「日本のアジア侵略」

油井大三郎他「世界の歴史14・28」 小林勇「惜懨荘主人 一つの岩波茂雄伝」 鈴木規夫「日本人にとってイスラームとは何か」 大塚初重他「シンポジウム日本の考古学3」 塩田潮「日本国憲法をつくった男 宰相幣原喜重郎」 黒板勝美編「新訂増補国史大系34・38」 歴史科学協議会編「歴史科学大系15 民族の問題」 高良倉吉「アジアのなかの琉球王国」 遅塚忠躬「フランス革命 歴史における劇薬」

沼田鈴子他, *Hiroshima Witness for Peace* .

3 社会科学

山極晃「米中関係の歴史的展開一九四一～一九七九年」 中田薫「法制史論集1～4」 エーリッヒ・フロム「生きるということ」 M・ウェーバー「一般社会経済史要論 上下」 野村純一他編「柳田國男事典」 斎藤慶一「人質127日 ペルー日本大使館公邸占拠事件」 小島武司「裁判キーワード 新版」 菱村幸彦他編「教育法規大辞典」 J・K・ガルブレイス「満足の文化」 マキャヴェッリ「君主論」 上野美子「ロビン・フッド物語」 櫻田嘉章「国際私法 第2版」 安田浩「天皇の政治史 睦仁・嘉仁・裕仁の時代」 田中五郎「発展途上国の債務危機 経緯と教訓」 佐伯胖他編「岩波講座現代の教育3・5」 東京大学社会科学研究所編「20世紀システム3～5」

経済企画庁編「経済白書 平成10年版」 平田哲「現代ボランティア考」 大林太良他編「日中文化研究1～13」 川田順造「廣野から アフリカで考える」 加賀乙彦「死刑囚の記録」 隅谷三喜男「大学でなにをまなぶか」 ヘンリー・A・キッシンジャー「核兵器と外交政策」 U・アレクシス・ジョンソン「ジョンソン米大使の日本回想」

ヨセフ・ハイヤー・イェルシャルミ「ユダヤ人の記憶、ユダヤ人の歴史」 宮里政玄「アメリカの対外政策決定過程」 「トルーマン回顧録1・2」

W・レオンハルト「ソ連にも革命が？」 飯部紀昭「アイヌ群像 民族の誇りに生きる」 山縣文治他編「福祉の仕事 第3版」 夏曉虹「纏足をほどいた女たち」 京極純一「日本の政治」

浦野起央編「資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史2 a～i・5 a」 鶴見和子「漂泊と定住と」 野村達朗「『民族』で読むアメリカ」 桜井錠治郎「EU通貨統合 歩みと展望」

ワールドウォッチ研究所編「地球データブック1998-99 人類の明日を決めるバイタル・サイン」 伊能嘉矩他「柳田國男の本棚1～26」 国際連合統計局「国際連合世界統計年鑑1995(42集)」 倉石忠彦他編「日本民俗誌集成3 東北編(2) 秋田県・山形県」 防衛庁編「防衛白書 平成10年版」 原田泰他「タイ経済入門 急ぎすぎた失敗からの再挑戦」 辺見庸「もの食う人びと」 社会科学「本田安次著作集16」 「柳田國男全集13・15」 阿部照哉他編「世界の憲法集 第二版」

「教育アンケート調査年鑑1998 上」 佐藤幸治他編「憲法五十年の展望」 浦田誠親「アメリカの小さな大学町 クオリティー・オブ・ライフ」 N・J・スメルサー「社会科学における比較の方法 比較文化論の基礎」 大久保利謙「日本の大学」 島田雄次郎「ヨーロッパの大学」 ルネ・ジロー「国際関係史1871-1914年 ヨーロッパ外交、民族と帝国主義」 W・ブレツィンカ「信念・道徳・教育」 佐藤宏他編「アジア政治読本」

H・J・モーゲンソー「国際政治 権力と平和」 川田順造他編「岩波講座開発と文化4」 矢野恒太記念会編「世界国勢図会98-99」 塩沢由典「市場の秩序学」 江守五夫「婚姻の民俗 東アジアの視点から」 安田次郎「中世の奈良 都市民と寺院の支配」 伊丹敬之他編「ケースブック日本企業の経営行動1・3・4」 小島麗逸「現代中国の経済」

4 自然科学

栗原堅三「味と香りの話」 村上和男「生命の暗号 あなたの遺伝子が目覚めるとき」 日経BP社医療局環境ホルモン取材班「環境ホルモンに挑む」 牧野富太郎「原色牧野植物大圖鑑 離弁花・単子葉植物編」 同「改訂版原色牧野植物大圖鑑 合弁花・離弁花編」 ガノレス「自然の機能について」

5 技術・工学

竹村真一「呼吸するネットワーク」 中村羊一郎「番茶と日本人」 酒井伸一「ゴミと化学物質」 鎌田慧「ドキュメント屠場」 森谷正規「文明の技術史観」 高橋裕他編「岩波講座地球環境学1・5・7」 加藤尚武編「環境と倫理 自然と人間の共生を求めて」 沼田眞編「自然保護ハンドブック」 米田雄介「正倉院と日本文化」

6 産業

澤崎坦「馬は語る 人間・家畜・自然」 J・ブノア・メシャン「庭園の世界史 地上の楽園の三千年」 是永東彦他「全集世界の食料世界の農村7・16・27」 河北新報社編集部「オリザの環」 稲本正

「森の自然学校」

7 芸術

諏訪春雄他編「講座日本の演劇 1～8」 沢木耕太郎「オリンピア ナチスの森で」 若菜みどり「イメージを読む 美術史入門」 ヴァージニア・ハガード「シャガールとの日々 語られなかった七年間」 玉泉八州男「女王陛下の興行師たち」 小川裕充監修「故宮博物院 3・4」 曾布川寛他責任編集「世界美術大全集 東洋編 2」 鳥越文蔵他編「岩波講座歌舞伎・文楽 7」

Braudy, Leo ed., *Film Theory and Criticism: Introductory Readings*.

8 言語

松村明他監修「ハイブリッド新辞林」 西村肇「サバイバル英語のすすめ」 酒井邦彦「どうして英語がつかえない？」 川澄哲夫編「資料日本英学史 1・2」 大内博「コミュニケーションの英語 基本表現とその発想」 竹林滋他「英語音声学入門 改訂新版」 梶田優他編「海外言語学情報 9」 J・M・スウェイルズ他「効果的な英語論文を書く その内容と表現」 F・ウンゲラー他「認知言語学入門」 井上京子「もし『右』や『左』がなかったら 言語人類学への招待」 萩野俊哉「ライティングのための英文法」 田窪行則他編「岩波講座言語の科学 11」

9 文学

本田義憲他編集委員「説話の講座 1～6」 「坂口安吾全集 4～8」 吉野秀雄「短歌とは何か 新装版」 同「万葉の詩情 新装版」 安田章生「西行 新装版」 上田三四二「茂吉晩年」 吉野登美子「琴はずかに 八木重吉の妻として」 「定本八木重吉詩集 新装版」 小林秀雄「信ずることと知ること」 中野孝次「碧落に遊ぶ」 D・H・ロレンス「アメリカ文学論 新装版」 「魯迅文集」 広津和郎「年月のあしおと下」 会津八一「自註鹿鳴集」 川村湊「異郷の昭和文学 『満州』と近代日本」 チェ・ゲバラ「ゲバラ日記」 渡辺一夫「フランス・ルネサンス文芸思潮序説」 ノーマン・メイラー「奇跡」 「テネシー・ウィリアムズ回想録」 武者小路実篤「人生論」 山田昭廣「仮面をとったシェイクスピア」 小津次郎責任編集「シェイクスピア作品鑑賞事典」 加賀乙彦「ドストエフスキ」 武田清子「わたしたちと世界 人を知り国を知る」 W・S・モーム「読書案内 世界文学」 「オー・ヘンリー傑作選」 長南実訳「エル・シードの歌」 H・ガスター「世界最古の物語 バビロニア・ハッティ・カナアン」 小山慶太「漱石とあたたかな科学 文豪のサイエンス・アイ」 内田魯庵「魯庵の明治」 竹内好「魯迅」 同「魯迅入門」 三浦綾子「塩狩峠」 テネシー・ウィリアムズ「欲望という名の電車」 ゲーテ「若きウェルテルの

悩み」 ヘッセ「デミアン」 トーマス・マン「トニオ・クレゲル ヴェニスに死す」 「情と理 後藤田正晴回顧録 上下」 「クライスト全集 1」 「吉川幸次郎全集 11・12」 「スタインベック全集 8・15・16」 サー・トマス・マロリー「完訳アーサー王物語 上下」 和田芳恵「一葉の日記 現代日本の評伝」 粟津則雄「正岡子規 現代日本の評伝」 オルガス・ハックスリー「すばらしい新世界」 中村光夫「二葉亭四迷伝 ある先駆者の生涯」 青柳瑞穂「マルドロオルの歌 現代日本の翻訳」 大曾根章介他編「日本古典文学大事典」 オウイディウス「悲しみの歌・黒海からの手紙」 沼野充義他訳「ユートピア旅行記叢書 9」 チャールズ・ディケンズ「大いなる遺産 上下」

Wordsworth, William, *Translations of Chaucer and Virgil (The Cornell Wordsworth)*.

寄贈図書

0 総記・全集

Eastman, Arthur M., *The Norton Reader: An Anthology of Expository Prose*.

1 哲学・宗教

日本キリスト教団高槻教会「ぶどうの枝 2 創立 15 周年記念誌」 錦林教会「ぶどうの樹 教会創立 30 周年記念号」 E・N 編「我と父は一なり 吉田清太郎先生没後 30 周年記念」 須磨教会五十年史編纂委員編「須磨教会五十年史」 須磨教会六十年史編纂委員編「須磨教会十年のあゆみ 創立六十周年記念」 須磨教会七十年史編纂委員編「須磨教会十年のあゆみ 創立七十周年記念」 洛北教会「草創期並びに戦中戦後の洛北教会の歩み 洛北教会八十年史別冊」 京都教会百年史編纂委員会編「京都教会百年史」 米田勇「昭和の殉教者」 岩本博民「井上活泉の思い出」 村尾ひで「くろ土 村尾ひで記念誌」 船橋文雄「五節の舞姫」 日本基督教連盟合同調査委員「日本基督教諸派合同基礎案」 土佐クリスチャン群像刊行会「土佐クリスチャン群像」 本多貢「ピュリタン開拓 赤心社の百年」 安部清蔵「實生活途上の基督」 田中伊佐久「罪をゆるしたもう神 田中伊佐久説教集」 日本キリスト教団大阪大道教会「恩寵の奇跡」 山田耕太他「イエス研究史 古代から現代まで」 朝日新聞社「『新約聖書』がわかる。 新約聖書はレインボウ」

Anderson, Bernhard W., *Understanding the Old Testament*; Kraeling, Emil G., *Bible Atlas*.

2 歴史

桐生清次「次の世は虫になっても 最後の警女 小林ハル口伝」 同「越後の慈母さま 百歳の庵主 木村霊山尼口伝」

Fielding, Henry, *The History of Tom Jones: A Foudling*; Stoetzel, Jean, *Without the Chrysanthemum and the Sword: A Study of the Attitudes of Youth in Post-War Japan*; Tuchman, Barbara W., *The Proud Tower: A Portrait of the World before the War 1890-1914*; Brinton, Crane etc., *Modern Civilization: A History of the Last Five Centuries*.

3 社会科学

国際交流基金他編「実践国際交流」 高道基編「幼児教育の系譜と頌栄」 「シオンの丘五十年 茨城キリスト教学園高等学校五十年・中学校三十五年誌」 「金城学院百年史」 「松山東雲学園百年史通史編」 金附洋一郎他編「道 20年のあゆみ」 「宮城学院最近 10 年小史 1987-1996」 「弘前学院百十周年記念誌 1987-1996」 「目で見る東洋英和女学院の 110 年 1884-1994」 「平和学園 50 年の歩み 1946-1996」 「名古屋学院創立 110 周年記念誌 写真に見る 10 年 (1987-1997) の歩み」 「フェリス白菊会の歴史」 「みどりもふかき 写真で見る清教学園の 40 年」 「広島女学院百十年史」 小林道彦「努めて旅人をもてなしなさい 東京 Y M C A 国際ホテル専門学校 60 年の歩み」 土岐元春他編「敬和学園その歩み 創立 10 周年記念」 堀川勝愛他編「敬和学園その歩み 創立 20 周年記念」 Eisenhower, Dwight D., *The White House Years: Waging Peace 1956-1961*.

7 芸術

新発田市教育委員会「新発田城跡発掘調査報告書 7 ~ 10 地点」

8 言語

Johnson, Burgers et al., *New Rhyming Dictionary and Poets' Handbook*.

9 文学

Frank, Joseph, *Modern Essays in English*; Barnet, Sylvan et al., *An Introduction to Literature*; Kaufman, George. S. et al., *Six Plays*; Crane, Stephen, *The Red Badge of Courage*; Cather, Willa, *Death Comes for the Archbishop*; Hersey, John, *A Bell for Adano*; Van Doren Stern, Philip, *The Life and Writings of Abraham Lincoln*; Wright, Richard, *Black Boy: A Record of Childhood and Youth*; Bisland, Elizabeth, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*; Keene, Donald, *Anthology of Japanese Literature*; Keene, Donald, *Modern Japanese Literature*; Warren, Robert P., *World Enough and Time*; Wright, Richard, *Native Son*.

川崎和雄氏寄贈図書

[シルクロードコレクション]

宮治昭他編「世界の博物館 19 シルクロード博物館」 並河亮「シルクロードをゆく 仏 インドから日本へ」 生江義男「シルクロードと宗教の道 西方浄土の起源を求めて」 増田精一「砂に埋もれたシルクロード 西域」 羽田明「西域」 護雅夫他「大世界史 9 絹の道と香料の島」 同「アジア高原の旅 民族と文明の興亡」 松田寿男「東西文化の交流」 同「砂漠の文化 中央アジアと東西交渉」 同「シルクロード紀行」 護雅夫他編「東西文明の交流 1 ~ 6」 青江舜二郎「シルクロードのドラマとロマン」 岩村忍「東洋史の散歩」 同「シルクロード 東西文化の溶炉」 松本清張他「私のシルクロード」 前嶋信次他「続・私のシルクロード」 森豊「シルクロードの駱駝」 同「西域の古都望見 シルクロード史考察」 同「孔雀文様の旅 正倉院からローマまで」 同「シルクロードの天使」 同「シルクロード幻想 蓮文様の道」 同「葡萄唐草シルクロード幻想」 同「花喰鳥文様展開」 同「樹下美人図考」 同「シルクロードの詩」 長沢和俊「東西文化の交流 新シルクロード論」 同「張騫とシルク・ロード 東西文化の交流」 同「敦煌」 同「楼蘭王国」 同「シルクロード」 同「シルクロード・幻の王国」 同「すばらしい探検の世界 シルクロードの東と西」 同「シルク・ロード踏査記」 加藤九祚「西域・シベリア タイガと草原の世界」 同「シルクロードの十字路 中央アジアの昔と今」 同「中央アジア遺跡の旅」 エル・ベルシャドスキー「砂漠に書かれた歴史 古代ホレズムの発掘」 井上靖「西域物語」 同「崑崙の玉」 同「クシャーン王朝の跡を訪ねて」 同「異国の旅」 同「遺跡の旅・シルクロード」 ヤクボーフスキー他「西域の秘宝を求めて スキタイとソグドとホレズム」 前嶋信次「シルクロードの秘密国 ブハラ」 香山陽坪「砂漠と草原の遺宝 中央アジアの文化と歴史」 ボリス・ジューコフ他「湖底に消えた都 イッシク・クル湖探検記」 石原明太郎編「幻想のシルクロード」 深田久弥他「シルクロード 過去と現在」 筑摩書房編集部編「現代世界ノンフィクション全集 1」 井上靖他「西域」 同「西域をゆく」 平山美知子「私たちのシルクロード」 同「カメラ紀行シルクロードの風」 同「カメラ巡礼シルクロードの詩」 星野紀夫「シルクロード五万キロ 砂漠の都市と文明」 スウェン・ヘディン「ヘディン中央アジア探検紀行全集 9 ~ 11」 池田貴雄他執筆・赤地経夫他写真提供「魅惑のシルクロード 1・2」 井上英敏「シルクロード冒険旅行」 神阪吉雄「シルクロードの鹿 その謎を追って」 加藤九祚他「ユーラシアシルクロード 1 ~ 4」 同「シルクロード 人と出逢う旅」 並河萬里「シルクロード二十五年 並河

萬里写真集」 同「砂漠の華 シルクロードのアクセサリー」 同「シルクロード 砂に埋もれた遺産」 同「カメラ紀行太陽と戦場のシルクロード」 同「シルクロードの幻像 東西文明の接点トルコ」 並河萬里他「走れ、青まめ シルクロードだよ」 中山時子「私のシルクロード 炎熱土漠を走破して」 NHK取材班編「写真集シルクロード1～6」 陳舜臣他「シルクロード 絲綢之路1～12」 松田壽男他「シルクロード1・2」 吉岡栄二郎「写真集仏教シルクロード 遙かなる2500年の旅」 河口慧海「第二回チベット旅行記」 小野圭一郎編「敦煌 その光と影」 陳舜臣「西域巡礼」 大村次郷「聖なるカトマンズ ネパール」 久野健「アフガニスタンの旅」 青柳健「玄奘三蔵の道歩く 西域・ヒンズー・クシュの山旅」 モタメディ遥子「シルクロードの十字路で」 松山善三他「旅は道づれガンダーラ」 同「旅は道づれツタンカーメン」 赤地経夫他「ペルシア シルクロードの曠野にて」 丹生谷章「トルコ バスの旅 風物と遺跡を訪ねて」 色川大吉「ユーラシア大陸思索行」 黒川欣映「ソ連ひとり旅 触覚がとらえた風景」 泉靖一「フィールド・ノート〔野帖〕 文化人類学・思索の旅」 松浪健四郎「シルクロードを駆ける 汗血馬の源流」 高田良信他「シルクロードから来た天女 法隆寺・飛天開眼」 林良一「シルクロード」 同「日本の美術 シルクロードと正倉院」 龍村平蔵「錦とボロの話」 北川桃雄「敦煌美術の旅」 健吾「敦煌の美術」 篠山紀信「篠山紀信シルクロード1～8」 平山郁夫「平山郁夫シルクロード変幻」 同「平山郁夫のすべて」 同「平山郁夫 シルクロードの美と心」 陳舜臣「北京の旅」 同「シルクロードの旅」 同「敦煌の旅」 深田久弥「シルク・ロード」 同「シルクロードの旅」 西川一三「秘境西域八年の潜行 上下」 G・N・カーゾン他「世界山岳名著全集1」 前嶋信次他編「シルクロード事典」

[その他]

P・ロチ他「世界教養全集7・8・16～19・22・23」 和辻哲郎「鎖國 日本の悲劇」 キングスレイ・ウォード「ビジネスマンの父より息子への30通の手紙」 A・J・トインビー「歴史の教訓」 海音寺潮五郎他「日本史探訪1～14・別巻2」 毎日新聞社編「1億人の昭和史1～15」 小泉信三「海軍主計大尉小泉信吉」 鈴木俊子「誰も書かなかったソ連」 野沢栄司「思春期の心理と病理」 斎藤昌「おとなになれない 登校拒否症と出勤拒否症」 俵萌子「父原病の子どもたち 父でなければできないこと」 盛田昭夫他「MADE IN JAPAN わが体験的国際戦略」 伊狩章他監修「越佐文学散歩 上中下」 五味川純平「人

間の条件1～6」 「林芙美子全集2 放浪記」 尾崎士郎「人生劇場 青春篇・愛慾篇・残侠篇・風雲篇」 穂積隆信「積木くずし 親と子の二百日戦争」

大山康一氏寄贈図書

(総記・全集) 情報アクセス研究会編著「現代人のための情報・文献調査マニュアル」 加藤秀俊「取材学 探求の技法」(哲学・宗教)エドワード・デボノ「水平思考の世界 電算機時代の創造的思考法」(歴史)ポール・クラヴァル「新しい地理学」(社会科学)佐藤進「地方財政総論」 クレイグ R. ヒックマン他「未来企業 500 生き抜くための経営原理」 坂田期雄「地域活性化・その戦略」 J・パリー・ルイス「都市経済論 集合論的アプローチ」 福岡正夫「ゼミナール経済学入門」 高橋毅夫「九 年代・日本経済 企業の時代のあとに」 安田三郎「社会調査ハンドブック 第3版」 高寄昇三「地方自治の経営 企業性の導入と市民性の確立」 高阪宏行「地域経済分析 空間的効率性と平等性」 高橋泰蔵他編「体系経済学辞典 第6版」 W・Z・ハーシュ「都市化の経済学 上下」 ミュルダール「経済理論と低開発地域」 大友篤「地域分析入門」 小野旭「労働経済学」 簗谷千鳳彦「計量経済学」 伴金美他「エコノメトリックス」 篠塚昭次「土地所有権と現代 歴史からの展望」 日本都市センター編「新しい都市経営の方向」 森川洋「都市化と都市システム」 朴仁鎬「韓国地域発展論」 佐藤進「日本の自治文化 日本人と地方自治」 野口悠紀雄「公共経済学」 同「ストック経済を考える 豊かな社会へのシナリオ」 日本経済政策学会編「経済政策学の誕生」 トム・ピーターズ「経営革命 上」 堺屋太一「知価革命 工業社会が終わる、知価社会が始まる」 佐藤進編「日本の財政学 その先駆者の群像」 石田英夫他「労働移動の研究 就業選択の行動科学」 渡辺利夫編「概説韓国経済」 T・J・ピーターズ「エクセレント・カンパニー 超優良企業の条件」 野中郁次郎「企業進化論 情報創造のマネジメント」 フリードマン「選択の自由 自立社会への挑戦」 佐藤進他編「地方財政読本 第3版」 磯村英一他編「地方自治読本 第6版」 日本都市センター編著「自治体の土地政策 都市環境の主体的創造をめざして」 森田優三「経済統計読本」 伊藤達也他編著「人口流動の地域構造」 香西泰「高度成長の時代 現代日本経済史ノート」 山田浩之「都市の経済分析」 宮尾尊弘「現代都市経済学」 西嶋周二他「国民経済計算の知識」 奥野正寛「ミクロ経済学入門」 加藤寛「経済政策」 藤田晴「財政」 西川俊作「労働市場」 宮沢健一編「産業連関分析入門」 宮川公男「計量経済学入門」 宮川公男「OR入門」 山田太門「公

共経済学」 日本経済新聞社編「英文経済記事の読み方 新版」 山本謙一「経済英語の手ほどき」 都留重人「地価を考える」 宇沢弘文「近代経済学の再検討 批判的展望」 加護野忠男「企業のパラダイム変革」 河野豊弘「変革の企業文化」 手塚和彰「労働力移動の時代 『ヒト』の開国の条件」 斎藤謹造編「近代経済学」 大塚勇一郎他「経済政策入門1・2」 荒又重雄他「社会政策1・2」 本間康平他「産業社会学入門」 荒憲治郎他「経済学入門 新版」 都留重人「経済学入門」(自然科学) 森田優三「新統計概論」 遠山啓「数学は変貌する 古代から現代まで」 伊利正夫「線形計画法」 今野浩「線形計画法」(産業) 宇井純「公害原論」 山本正雄編「日本の工業地帯 第3版」 同「日本の工業地帯 第2版」 山口嘉之「水を訪れる 水利用と水資源開発の文化」 村田喜代治「地域開発と社会的費用」 安東誠一「地域経済改革の視点」 宇佐美繁他「工業化社会の農地問題 構造問題と土地問題の接点」 磯辺俊彦他編「日本農業論」 竹下昌三「地域開発と地方都市」 佐藤俊雄監訳「観光のクロス・インパクト 経済・環境・社会への影響」 叶芳和「農業・先進国型産業論 日本の農業革命を展望する」 清成忠男「地域産業政策」 佐貫利雄「産業構造」 宮本憲一「地域開発はこれでよいか」 八幡和郎「遷都 夢から政策課題へ」 佐和隆光編「サービス化経済入門 その全データと展望」

事務室の窓から

本号は新発田市在住の読書人で、篤学の士である川崎和雄さんからの原稿で紙面を飾ることを得た。氏は40年近くも新潟県教育界で社会科教員として大きな足跡を残された方である。今回、氏が多年にわたって収集されたシルクロード関係の文献を中心に蔵書の寄贈を受けた(表紙裏

に「川崎和雄シルクロード・コレクション」のスタンプが捺されているのがそれである)ことを機に、そのような収集の原動力となった「志」の所在をふり返っていただいたわけである。学ぶことのたのしさにまだ開眼していない若者たちには、特に学んでほしい先輩の後姿と言える。なお、新発田市役所の大山商工観光課長からも蔵書の寄贈を受けた(「新着図書」のリスト参照)。

伊藤先生と桑原先生からは、いずれもご専門分野とのかかわりで、示唆に富む随想をお寄せいただいた。桑原先生のは、若き日の読書の意味を考えるという意味で、あえて学生の南雲龍君の一篇と合わせて、「読書のたのしみ」という小特集とさせていただいた。南雲君には、前号の「現代の若者たち」小特集に対する学生側の反応として書いてもらった。青年の客気もあってか、いわばお仕着せの読書のすすめに対し「自分流読書」を宣言している。読書が、内面の欲求から始まるものであることは当然であるし、ある程度読みこんでいなければ、このような発言などできないことを考えれば、むしろ頼もしい。

さて本誌は、1年前の学園祭でデビューした。試行を重ねつつ5号を数え、いつまでも「準備号」でいられなくなったので、本号から「準備」の接頭辞だけはすこととする。本来なら今号をあらたに「創刊号」とすべきであろうが、あえてこのような締まりのない方法をとることにした。理由は、そもそも準備号の発刊自体、継続刊行の成算があったわけではなく「行けるところまで行こう」ということで始まったもので、その事情に変わりがないからである。「ファンファーレもない」スタートの形はいっそ似つかわしい。ねがわくは、読者、ユーザーのご支援を受けて、時に日蔭におかれても、水分が足りなくても、生き延びて行ける野の花の強さに恵まれんことを。

(As)

混配のお知らせ(再録)

1998年 10月

お気付きのように、新学期から図書の配架方法が、和書と洋書の混合配架になりました。配架の位置がわからない方は図書館員に訊いて下さい。なお、使い終わった本は自分で書架に戻さないで返却台に戻して下さい。